テキスト抜け、SSのトリミングや貼付位置の甘さがありますがご容赦願います。

FF14　備忘ログ　期間限定クエスト

2014年1月21日　～　2月3日

©2010－2014 SQUARE ENIX CO.,LTD.All Rights Reserved. FINAL FANTASY XIV

人呼んで「黒い悪魔」

信じがたい情報が舞い込んできた。
何でも、ここ黒衣森を含むエオルゼア各地で、巨大なララフェルの如き人影が目撃されているのだという。ララフェル族といえば、もっとも小柄な民として知られる存在。それが巨大化するとは、「空飛ぶチョコボ」くらいのデキの悪い冗談だ。自称目撃者たちは、とうの昔に「降神祭」は終わったというのに、まだ酒宴の酒が抜けていないのか。
だがしかし、一人二人の目撃談であれば酒宴のヨタ話として無視できても、目撃者数が二桁三桁と増えるに従い、話は違ってくる。
もし、この巨人ララフェルが実在するとしたら……そう思うと何やら不安になってしまうのは筆者だけだろうか。

冒険者たちが集まる茶房「カーラインカフェ」でも、この巨人ララフェルの話題でもちきりだ。今では誰が呼んだか「黒い悪魔」なる仰々しい異名までついてくる始末。噂によれば、「黒い悪魔」はスプリガンを使い魔のように使役しているともいう。巨人ララフェルの正体を探るうえで、ひとつのヒントになりそうだ。
本誌も、さっそく事の真相を探るべく、新人記者を取材に送り込んだので、続報を待ってほしい。

オリバー・グッドフェロー

黒い悪魔

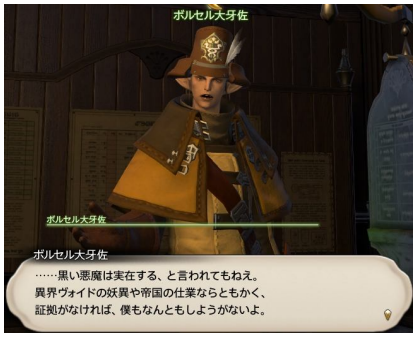
クロ・バジリ ： 噂好きたちの愛読誌「週刊レイヴン」をご存知ニャ？　わたくし、そこで記者をやってるクロ・バジリですニャ！
よろしくお願いするニャ～。
冒険者さんは、知ってるですかニャ？　最近、各地で奇妙な天変地異が起こってるんですって！
第七霊災を思わせる、炎の雨が降ったかと思えば、季節はずれの雪嵐が吹き荒れ、竜巻が魔物をも巻きあげる……。
そして、天変地異が起こるときニャ～、きまって「巨大な黒い悪魔」が現れるって噂ですニャ！
この件を担当してる双蛇党に取材したら、「帝国のかく乱作戦の可能性もある」って言われたけど……
そんなこと記事にしても、読者は食いついてきませんニャ！
そこで、冒険者さんの出番ですニャ！　巨大な黒い悪魔が存在する証拠をつかんで、
双蛇党の「ボルセル大牙佐」に突きつけてちょうだいニャ！
わたくしの調べによれば、巨大な黒い悪魔は、エオルゼアの各地で目撃されてますニャ。
がんばって、証拠をつかんできてくださいニャ～！！

？？？？ ： あらあら、あっけないですわ。これでは物足りませんわね。
……いいでしょう。わたくしが、みなさんを見定めてさしあげますわ！

黒い悪魔 ： オーホッホッホホホホホ！
黒い悪魔 ： わたくし、ぶち切れましたわ。

黒い悪魔 ： あら、この世界の冒険者も、なかなかやりますわね。
あなたがたへの興味も尽きませんけど……　わたくし、あまり暇ではございませんの。
そろそろ次の実験に移らせていただきますわ。それでは、ごきげんよう！
オホホホホ！　オーッホッホホホホ！

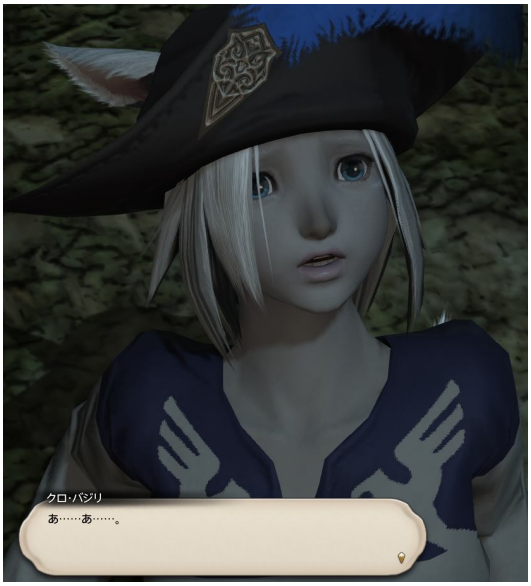
ボルセル大牙佐 ： ……黒い悪魔は実在する、と言われてもねえ。異界ヴォイドの妖異や帝国の仕業ならともかく、
証拠がなければ、僕もなんともしようがないよ。
はてさて……君が持ってきてくれたお人形は、とんでもなく強い魔力を宿しているようだ。
幻術の心得がない僕でも、わかるほどだよ。
もしかすると、記者君の言うとおりかもしれない。このお人形に宿る魔力は、以前にウルダハで相対した、異界ヴォイドの闇より暗く濃い……。



人事担当官 ： なんですっ！？

クロ・バジリ ： あ……あ……。

人事担当官 ： 大牙佐っ！



？？？？ ： オーホッホホホホホ！！
わたくしの、すてきな姿に驚きまして？　でも、わたくしは見世物じゃなくってよ。
礼節というものをご存じないのかしら？　このわたくしを迎える準備ができていないなんて、あなたがたの良識を疑いますわ。
あらあら、ポカーンとして！　そのぶんじゃ、わたくしがどこの誰かなんて、考えつきもしないんでしょうね。オホホホホ！

ボルセル大牙佐 ： 残念ながら……我々はつい今しがた、その点を問題にしていたのですよ。貴女がどこから来た、誰なのか、ということをね。

？？？？ ： オヤマァ、無知はいけませんわ。しかも、ご自分の名を告げもしないうちから、淑女に名前を訊くなんて、失敬な殿方ですこと！
とはいえ、ここはどうやら未開の地。礼儀をわきまえぬチョコボの骨がいても、不思議ありませんわね。オーホホホホホ！

ボルセル大牙佐 ： まあ、待ちたまえよ。喋ってくれそうな雰囲気なんだから、ここは思うさま喋っていただこうじゃないか。

シャントット ： それでは、名乗らせていただきますわ。わたくしの名は、シャントット。
ウィンダス連邦の魔道士。ヴァナ・ディールという世界で活躍中の、正義の味方ですことよ。

ボルセル大牙佐 ： なかなか、素敵な自己紹介じゃあないか。……それで、正義の味方さん。
このグリダニアへは、どのような用事でいらしたのです？

シャントット ： その質問なら、答えるにやぶさかではないことよ。わたくし、過去に次元転移の魔法を開発したんですの。
その魔法は、ちょっとした事情で、封印していたんですけれど……
少し前に改良点を見出して、封印を解いたのですわ。……ほら、よく言いますでしょう？
「探求の心を失わないことは、黒魔道士の大切な資質」と。

ボルセル大牙佐 ： 次元……？　転移……？　……ふむ、よくわかりませんが、わからなくもないですね。

管理担当官 ： ……ボ、ボルセル大牙佐、あの方の話を、ご理解なさっているのですか？　自分には、さっぱりわからないのですが……。

ボルセル大牙佐 ： うん。実は、僕もさっぱりわからないんだ。だけど……なんとも、すごそうな話だねえ。

シャントット ： 魔法の改良に成功したわたくしは、さっそく新たなる次元転移の魔法を使い、この世界に来たのです。
そして、この世界が腐っているなら、わたくしの、わたくしによる、わたくしのための帝国を作り、
立て直して差し上げようと思い立ったのですわ！
まずは手始めに、わたくしの魔力を注いだ魔法人形で調査用の実験場を、確保しようとしたのですけれど、
この地に漂う魔力にアテられて暴走して……いえ、オホホ。
ま、ともかく、そこのあなた！　なかなか楽しませてもらいましたわ。お近づきのしるしに、これを差し上げます。
捨てたら、呪われますわよ。

管理担当官 ： ……待てよ……次元なんとか魔法の封印……。わたくしのための……帝国……！？
つ、つまりですよ、すべての元凶は……！

シャントット ： あら、わたくしとしたことが！　時間が経つのも忘れて、話しこんでしまいましたわ。
みなさん、わたくしはもとの世界へ帰らねばなりません。また会う日まで、ごきげんよう。
言い忘れておりましたけれど、魔法人形は、そのうち勝手に停止しましてよ。
放っておいても、なーんの問題もありませんわ。

シャントットの声 ： オホホホホ！　オーホッホッホホホホホ！！

管理担当官 ： ……なぜ、逃がしてしまわれたのですか？

ボルセル大牙佐 ： 気づかなかったのかい？　シャントットなるご婦人のまとった魔力、エオルゼアを揺るがしかねないものだった。
破壊やら侵略やら言いだす前に、自分の意志で帰ってくれるというのなら、万々歳じゃあないか。

クロ・バジリ ： ……にゃ。にゃにゃにゃっ！？　ニャんて不覚！　ビックリしすぎて、取材を忘れるなんて！
大牙佐、あの巨大なララフェルもどきは何ですニャ！？

ボルセル大牙佐 ： ◇◇◇君、ご苦労だったね。これから先も、あの人形が暴れることがあるだろうが、そのときは、討伐に力を貸してくれると助かるよ。